

3 調査研究

蟻の首遺跡出土の縄文土器について

岩井 奈緒子

蟻の首遺跡出土の縄文土器は市指定有形文化財(考古資料)である。昭和45年10月24日に詫間町有形文化財に指定され、現在は詫間町考古館の一階に展示されている。非常に貴重な土器であるが、今まで図化や検討はされていなかった。よって、今回はこの土器について検討し、その意義について考えていきたい。

出土土器について

器種：壺 口縁の一部が欠損

法量：口径 5.8 cm 器高 8.3 cm 胴部最大径 10.8 cm 底部径 4.7 cm

器形：わずかに内傾する口縁部をもち、端部は丸く仕上げられている。胴部は扁平な楕円形を呈しており、底部にかけてすぼまる。口径と底部径の中心はややずれるようである。底部は中央に向かってくぼむ。

文様：口縁部は無文である。以下は縄文帯で文様を描く。沈線の一部が縄文によってつぶれているため、沈線を描いてから縄文を充填したものと思われる。胴部は三単位の渦文と、その間を埋めるように帯縄文が段を成す。全体的に器表はかなり摩滅しており、はっきりとは確認できないが、おそらくRL縄文であったと推測できる。

頸部には太い沈線が巡る。下の文様と対応するように3単位に分かれ、沈線の始まりはしっかりと棒状工具を押し付けた跡が確認でき、終わりは力を抜いてはらうような形状になる。その沈線を上辺とした一段目の帯縄文の一部から、下方へ帯が伸び、大きく弧を描いて二段目の帯縄文とぶつかる。弧の始まりは、一段目の帯としっかり接合しているもの(B：以下英字は図版と対応)、開始地点の外側の沈線がわずかに幅をあげ、二段目の帯とぶつかるようにみえるもの(A)、三段目あたりから外側の沈線がはじまり、それまでは縄文も施されていないもの(C)と多様である。

二段目の帯縄文の端は鉤状になっており、弧と合わさって渦文を成している。中央に位置する鉤状文はしっかりと沈線で囲まれているものもあれば(A)、先端が結合していないもの(B、C)もある。渦文は三か所確認でき、その間を充填するように二段目の帯縄文に平行して、三段ほど帯縄文が施される。帯縄文は完全に楕円形を成すものや片方だけ開放されているもの、渦文とぶつかるものや直前で止まるものなどさまざまである。また、この渦文の下にはそれぞれに小さなJ字文がくっついている。最下段の縄文帯とぶつかるもの(C)やJ字文の直前で止まるもの(A)、完全に独立しているもの(B)となっている。文様構成は統一されているが、その細部は細かな違いがみられる。

年代：壺は中期末から後期初頭にかけて出現する器種とされている(幸泉 2010)。壺の出土数はごく少数であることから、壺の形状から年代を検討することは困難であり、今回は文様を中心と

して、年代を考えていきたい。

大きな渦状の主文は縄文時代後期前半に、瀬戸内地域を中心に広い地域で分布する福田 K2 式の特徴といえる。福田 K2 式は三本もしくは二本沈線をもち、主文と従文の帯縄文は連結し、斜方向や縦方向に走るのに対し、蟻の首遺跡の土器は主文と接合するとは言えず、独立した横位の従文となっている。福田 K2 式と同時期に、西南四国地域を中心に分布する宿毛式は二本沈線で横位の多段構造をもつ縄文帯をもち、一部が連結し区画をなす。渦文などの主文は小ぶりなものが多い。宿毛貝塚出土資料の中には I 群 8 類(福田 K2 式そのもの)や I 群 4 類(入組文による渦巻文が見られ、二本沈線による曲線的な磨消縄文帯を有するもの、福田 K2 式系統とされている)があり、他にも福田 K2 式の要素が取り入れられている資料があることは注意したい(前田 1994)。福田 K2 式に関しても、口縁部文様帯に対して、上下の帯縄文が接続して、宿毛式に近い形状をとるものもあり、宿毛式の影響が伺える資料も確認されている(千葉 1997)。そして、福田 K2 式と宿毛式の両者の特徴を兼ね備える土器は周辺地域で出土しており、一概にどちらかであるとは断定しがたい。また、宿毛式に並行もしくは後続するとされる三里式では主文は渦文もしくは同心円文とされ、独立する従文は横走する楕円文などが段に重なるといった構造をもち、こちらにも近い要素がある。三豊市詫間町箱遺跡から深鉢の耳状突起が表採されており、高知県松ノ木遺跡の遺物に非常に類似した特徴をもつ(三豊市教育委員会 2021)。このように高知県域と荘内半島周辺の遺跡との関係性が想定される要素はほかにも存在する。よって、この土器も福田 K2 式の要素ももちつつ、西南四国地域の影響も受けていると推測できる。この土器は福田 K2 式から縁帯文初期あたり、すなわち縄文時代後期前半あたりの土器であると思われる。

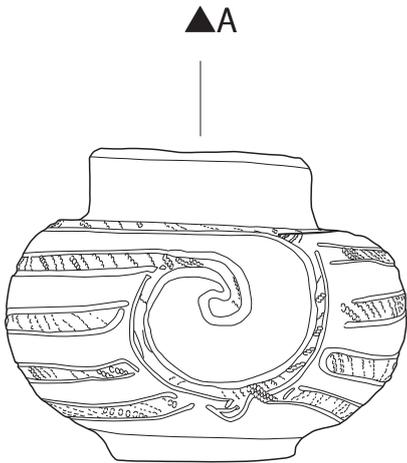
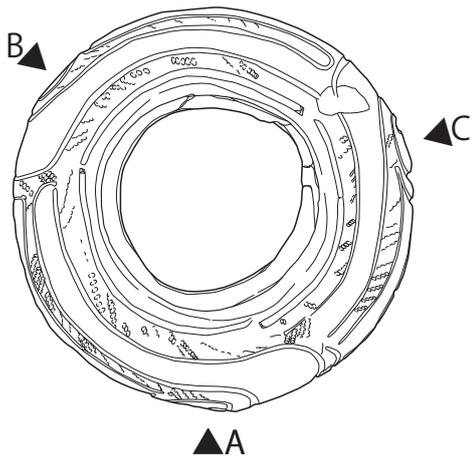
まとめ

荘内半島周辺には早期から後期に至るまでの縄文時代の遺跡が分布している。該当する段階の土器を主体的に出土する遺跡はまだ確認されていないため、壺がほぼ完形で出土していることは大きな意義があると言えよう。周辺の船越遺跡からは、整理作業中ではあるが、在地の土器に加え、九州や中国地方といった他地域のもと思われる土器が出土している。この地域が他の地域との交流があったことは間違いなく、今後も荘内半島周辺における縄文時代の様相について、より一層検討を加えていきたい。

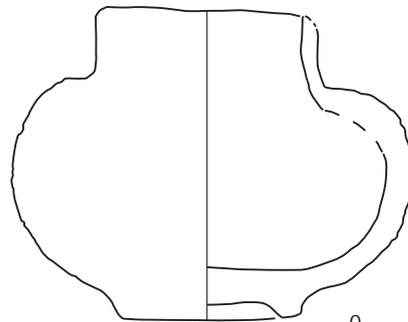
参考文献

- 千葉豊 1997 「福田 K2 式と宿毛式・序論一型式弁別の視点について一」『古代吉備』第 19 集 古代吉備研究会
- 石田由紀子 2008 「中津式・福田 KII 式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 前田光雄 1994 「宿毛式, その特質」『研究紀要』第 1 号 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 香川県教育委員会編 1983 『新編香川叢書 考古篇』
- 幸泉満夫 2010 「II 各地域の土器編年 2. 四国」『西日本の縄文土器』真陽社
- 三豊市教育委員会 2021 「3 調査研究 荘内半島周辺遺跡の表採遺物について」『香川県三豊市 詫間町民俗資料館・考古館 年報 2』三豊市教育委員会

図版 1



断面図



蟻ノ首遺跡 縄文土器壺実測図(S=1/2)

▲A



图版 2

▲B



▲C

